

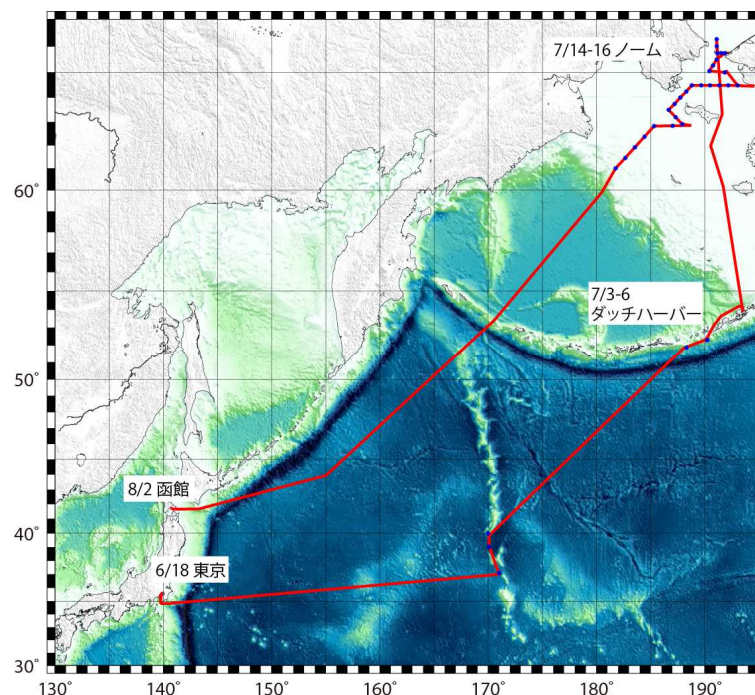
練習船おしよろ丸が北極圏海域を4年ぶりに航海

概要：

本年6月から2か月間、水産学部附属練習船おしよろ丸がベーリング海から北極圏海域へ航海を実施します。おしよろ丸V世の平成26年7月の竣工後、初の外国航海であり、おしよろ丸としては、IV世として実施した平成25年以来4年ぶりの外国航海となります。

本航海には、実習科目「洋上実習Ⅱ」として本学水産学部の学生が、文部科学省教育関係共同利用拠点制度を利用して他大学の学生が、そして文部科学省北極域研究推進プロジェクト(ArCS)に参加する学内外の研究者が、それぞれ乗船します。途中、アメリカ・アラスカ州のダッチハーバー及びノームに寄港しながら、52日間の実習・各種海洋調査及び生態系調査を実施します。

なお、本航海では公益財団法人日本財団「海と日本 PROJECT」の助成により、全国の中高生等の若者に「海」の魅力が伝わり、「海」への知的好奇心が生じるきっかけとなるような画像・動画を収録し、公開する予定です。



予定航路

背景・意義：

北極域は、温暖化による温度上昇が他の地域と比較して著しく高いと予測されており、北極海の海氷減少は予測よりも急速に進行しています。国際極年（IPY, 2007年, 2008年）と2013年に実施した「おしよろ丸」によるベーリング海―北極海での観測では、温暖な太平洋の水が北極海へ多く流入することにより海氷減少が促進され、それに伴いプランクトン分布や基礎生産力（海水へ溶け込んだ二酸化炭素を海洋植物プランクトンが取り込むことで固定される炭素の量）が変動することを明らかにしてきました。

これらの観測航海から4年以上が経過しましたが、北極海の海氷は更に減少し、将来的に夏季の海氷は完全に消え去り、海洋生態系に大きな影響を与えることが危惧されています。

北極海域では、生息する生物の北方シフトや食性（食物の種類や食べ方についての習性）の変化が懸念されていますが、そのメカニズムには不明な点が多く、海洋生物資源の持続的利用と生物多様性の保全のため、北極周辺各国のみでなく国際的に取り組むべき喫緊の課題となっています。また近年、低緯度域を起源とする汚染物質が北極の海洋生物に取り込まれている可能性があり、食物網（いわゆる食物連鎖）を通してより高次の生物に濃縮することが懸念されています。

さらに、北極圏植物相・動物相保存作業部会（CAFF）の2013年の報告書では、北極に生息する生物相の全容解明にはまだほど遠い状況にあり、生態系の構造や機能、生態系サービス（生態系を由来とする、人類にとっての利益）などについても不明な点が多く残されているのに加え、温暖化や人間活動の変化が北極の生物多様性にとって大きな脅威となりつつあるとされています。北極の生物多様性を保全するためには、調査やモニタリングにより科学的情報を収集し、生物多様性に対する影響への理解を深めた上で対策を講じることが非常に重要です。

航海期間：2017年6月12日（月）函館港（弁天埠頭） 出港
15日（木）東京港（月島F4埠頭）入港
18日（日）東京港（月島F4埠頭）出港
8月 2日（水）函館港（弁天埠頭） 帰港

おしよろ丸V世について：



水産科学やその関連分野の研究と実習に取り組む教育プラットフォームとして、この分野で活躍する人材の育成を目指した練習船です。国内外の大学・研究機関との交流や国際共同研究等の推進を図り、東日本大震災で壊滅的な打撃を受けた現地水産業の復興支援等に寄与することを目的として、平成26年7月に竣工しました。

初代「忍路丸」から数えて5代目となる本船の基本コンセプトは「静かで揺れない洋上キャンパス」です。北海道近海からベーリング海、北極海を含む亜寒帯における航行を考慮し、IC級耐氷構造を備えています。

お問い合わせ先

北海道大学大学院水産科学研究院 准教授 大木 淳之（おおき あつし）

TEL：0138-40-8870 E-mail：ws0011@fish.hokudai.ac.jp